

留学生の講義理解

—— 構造マーカーが講義談話の構造把握に及ぼす影響について ——

梅 村 修

Lecture Comprehension of Foreign Students in Japan : The Influence of structural Marker on the understanding of Written-Style Discourse in Lecture

Osamu UMEMURA

1. はじめに

追手門学院大学には、2003年12月4日現在、学部には206名、大学院に29名の留学生（査証上“留学”の在留資格を有する者のほか、日本人の配偶者等も含む）が学んでいる。その学部内訳は圧倒的に経済・経営の両学部偏っており、178名の在所帯を成している。この人数は、一般学生を含めた両学部の総学生数3,520名の5.06%を占める。すでに、かなりのmassを形成している留学生に対して、本学はどれほどの教育サービスを提供できているだろうか。

筆者の見るところ、授業料減免制度や奨学金支給制度、国際交流教育センターの人員や留学生資料室等の施設は、その充実度において、他の同規模の私立大学に決してひけをとるものではない。しかし、肝心の留学生教育の内容には、まだまだ改善の余地を残していると思われる。

2. 本研究の目的

この小論で筆者は、日本語教育の立場から、追手門学院大学で学ぶ留学生の学習・研究活動を支援する具体的な手だてを考えてみたい。それは日本語教育と大学専門教育をつなぐ「橋渡しの教育」（横田1990）の試みの一環といえようか。後述するように、現在、日本の大学に在籍する留学生が学習・研究を進めていく上で感じている困難はさまざまである。中でも日本語

留学生の講義理解

表1 学部留学生の困難度（平均値） 1：特に問題ない 5：非常に困難

		人数	友人と話す	先生と話す	事務室	講義	セミナー	レジュメ	教科書	レポート	口頭発表
1年	国費	19	1.53	3.11	2.53	4.16	4.11	3.31	3.53	—	—
1年	私費	18	1.72	3.06	2.75	3.86	4.11	2.46	2.44	—	—
2年	国費	11	1.09	2.82	2.55	2.45	3.27	2.45	2.36	2.64	3.60
2年	私費	12	1.00	2.90	2.60	2.70	3.40	2.20	1.80	3.00	3.10

* 名古屋大学留学生交流センター調べ（2003. 3 留学交流 vol 15 no. 3 p. 8より抜粋）

で講義を聞き、理解することに困難を感じている留学生は大変多い。最近の学部留学生の実態調査（表1）を見てもそれは明らかである。

この小論では、①講義の理解を困難にしている言語的要素とは何かを先行研究を振り返りながら考察し、②講義の談話構造を把握するための「構造マーカー」に学習者の注意を向けさせることがどれほど講義理解を促進させるかを、筆者の授業実践の報告を通して検証することを目的とする。

3. 留学生の学習・研究上の問題点

ところで、大学で学ぶ留学生への日本語支援のあり方には、大きく二つの方向があると思われる。一つは、“導き”，もう一つは“後押し”である。“導き”とは、日本語能力の不備に起因する学習・研究上の困難点を留学生に自覚させ、講義の聴き方やノートの取り方などを具体的に教えることである。いわば、日本語の海で格闘している留学生に手を差し伸べて“導く”イメージの支援である。この支援のベクトルは従来の日本語教育の延長線上にあり、多くの留学生が日本語教師に期待するのはまさにこれである。一方、“後押し”とは、留学生一人一人が経験的に身につけた学習・研究のストラテジーを日本語教師が発見して、学生が意識的にそれを活用できるように道付けをしてやることである。このスタンスに立つ教師はインストラクターというよりアドバイザーである。現に日本語のハンディーを背負いながら、多くの留学生は何とか講義を理解し、レポートを提出し、試験に合格点をとって単位を取得している。山下（2000）の指摘するように、そこには“文字情報の解読”や“慣れ”や“予習・復習”といった留学生独自の学習ストラテジーがあるにちがいない。それを日本語教師が個々の学生に応じで見出し、手を添えてやるのである。

本稿で筆者が提案する留学生のための学習・研究支援は、前者の“導き”に当たる。では、次に日本語教育の立場から、なにを“導く”のか、問題をもう少し限定してみたい。そのためには、大学で学ぶ留学生が日頃感じているであろう、学習上の困難点を挙げてみるのが手取り早い。

- ① 講義を聴いて理解することができない。

- ② 講義を聴いてノートに書き留めることができない。
- ③ 専門分野の文献が読みこなせない。
- ④ ある程度の長さの、論旨の整った内容をレポートや論文にまとめられない。
- ⑤ 専門分野の内容に関する自分の意見や感想をまとめて発表することができない。

中でも、①と②の、講義を聴きとりノートを取ることは、すなわち非常に長い談話を聴いて理解しながら書き留める作業は、大学での学習の中心であり、始まりである。ところが、ほとんどの留学生は、大学入学以前の教育機関で、日本語で講義を聴く訓練など受けていない。彼らが知っている日本語は構文的にシンプルで内容的に身近なものがほとんどである。したがって、上記の5つの困難点の中でも、講義に関わる最初の2点は、もっとも日本語教師の“導き”が待ち望まれる点のはずなのである。この小論では、目的の章でも述べたように、専門文献の読解指導や論文指導に先立つ急務として、講義を聴く技術の養成を議論の中心に据えたい。

4. 先行研究

では、次に、日本語のどんな要素の不足が、留学生の講義理解の妨げになっているのかを、先行研究を参照しながら検討してみたい。

4-1 語 彙

まず、従来から、専門分野の講義で使われる日本語（以下、専門日本語と記す）の特徴として指摘されるのは、語彙の特殊性である。講義には、日常会話では通常使われない語彙が多用される。そのため、留学生は講義が理解できないというのである。では、留学生にとって、どんな語彙が難しいと感じられるのだろうか。

真っ先に思い浮かぶのが、経済用語とか理工学用語といった術語、専門用語である。専門用語に関しては岡（1994）、小宮（1995）、村田（1996）、三國（1998）などで論究が行われている。

三國（1998）によると、専門用語は必ずしも講義理解の妨げにはならないという。なぜなら、実際の講義では、話し手は聞き手に配慮して、専門用語のような耳慣れない術語は板書したり、言い換えたり、ポーズをとってゆっくり発音したりする傾向があるからだという。

小宮（1995）は、専門用語を大きく、日常的にも使われる専門用語と専門分野のテキストの中にしか使われない専門用語に分け、前者に習熟しなければならないことを明らかにしている。日常的に使われる専門用語とは、日本人には日常的でも外国人には必ずしも日常的ではない語である。たとえば、「公定歩合」「第三次産業」などは日本人なら高校生でも知っている日常的な経済専門用語だが、留学生には初めて聞く難解な術語である可能性が高い。このことは関

(1994)も同様に指摘している。

山元(1993)は、講義を構成する用語を、専門的な「内容語彙」と「一般語彙」に大別し、その中間に講義という特殊な談話を構成する「談話語彙」—例えば、問題、原因、解決、結果など、講義らしさを形成する語彙—の存在を指摘する。そして、この「談話語彙」が講義の理解を助ける「手がかり語」の役割を果たしているのだと主張している。もっとも山元は、「談話語彙」を「テキストが論文として認知できる要因をになう語彙」としているが、この定義の「論文」の部分「講義」と読み替えても意味は変わらないと思われる。論文の「談話語彙」は、そのまま講義でも頻繁に使われるからである。

山本(1995)は、テキスト分析を通して、講義の聴解のメカニズムを明らかにしているが、その中で「(話し言葉だけでなく講義のような書き言葉的性格の強いテキストの聴解にも)基本的な和語知識が漢語知識以上に重要な言語知識となっている」という知見を得ている。

4-2 講義特有の表現

講義の聴解を困難にしている語彙的要素に関する研究とは別に、講義形式のテキストだけに現れる独特の言い回しに焦点を当てた研究も見られる。こうした表現は、そもそもは聞き手の理解を助けるための話し手の配慮からなされる場合が多いのだが、留学生には逆にマイナスに働いてしまうことが多い。

三國(1998)は、講義の中に聞き手の理解を助けるために、「話の流れを示す表現」「関連性を持たせながら説明するために、以前言ったことを思い起こさせる表現」「直接語りかけ、聞き手の注意を喚起する表現」以上3つの表現が、さまざまなバリエーションに姿を変えて現れることを指摘している。

野村(1996)は、文科系と理科系の講義に現れるフィラーの数量的調査を行い、「フィラー全体の出現率では文科系が理科系のおよそ2倍の高率を示したにもかかわらず、そのうち働きかけのあるフィラーでは理科系が文科系の2倍以上となっている。」とし、文科系の講義より理科系の講義に現れるフィラーのほうが、聞き手にとって意味のあるものが多いという興味深い指摘をしている。

4-3 構文

さらに、留学生の講義理解を困難にしていると考えられるものに、構文の複雑さや一発話(ある程度の意味的・構文的な整合性を持つ一つのまとまり)の長さの問題があると思われる。

金久保他(1993)では、理科系と文科系の講義を比べることによって、それぞれの講義の特徴を明らかにしている。中でも興味深い指摘は次の点である。理科系と文科系では、比較的留学生が苦手とする受身、使役、可能、接続詞の用法にはあまり差がなかったが、文科系の講義

では、文（一発話）の長さが長く、そのために、従属節が多用され、係り受けの不对応などのいわゆる“ねじれ文”が出現する頻度が高い。一方、理科系の講義では、主語の省略や文末体言止が多い。こうした理系、文系それぞれの講義における特徴は、直接、留学生の講義理解の困難につながるものである。

山本（1994）は、講義のみならず、広く上級日本語学習者の聴解力が下位知識（文法知識、語彙知識、文末予測力、背景知識）とどのような関連を持っているのか、そして下位知識はどのような階層化構造を形成しているのかを明らかにしている。山本の指摘の中でとりわけ示唆に富んでいるのは、聴解力を下支えする下位知識のなかでも、語彙（和語・漢語）的な知識の不足を補う文法の知識（の運用力）と音声の知識（の慣れ）がきわめて大切であるということである。したがって、いくら専門用語を頭に詰め込んでいても、文法と音声の習得がおろそかであれば、大学の講義理解はおぼつかないことがわかる。

4-4 談話構造

ここまでの先行研究は、もっぱら特殊な用語や複雑な構文などが、大学の講義を聞き、理解するのを妨げているという問題意識からなされている。確かにこうした発想は間違っていない。しかし、筆者には、講義に特徴的な語彙や表現、文法の他にも、講義理解を難しくしている要素があると考えられる。というのは、学部留学生から次のような嘆きをよく聞かされるからである。曰く、「集中して講義に臨めば臨むほど、結局なにが話されていたのかわからなくなる」、「先生の話の部分部分はほとんど聞き取れるけれど、その部分が講義全体のなかでどういう位置づけにあるのかわからない」。日本語能力試験1級にも合格したような優秀な学生でもよくこうした愚痴をこぼす。現に彼らの講義ノートをもせてもらうと、そこには板書が羅列されているだけで、語句や数値や記号の有機的な関連性はほとんど記されていない。そのノートを元に講義を短く再現してみろといっても、彼らは口ごもるだけである。思うに、留学生のほとんどは、いかに論理的に整理して講義を聴くか、いかに話の大枠を瞬時に見抜いて予測しながら聴き進めるか、といった能力が開発されていない。だから、話の枝葉（語彙や文法）は正確に聴き取れても講義全体の構造は把握できないのではないか。つまり、語彙や文法の知識が完璧でも、講義の談話構造が把握できなければ、講義を理解したとはいえないのではないか。

講義という特殊な談話の構造を大づかみに把握させる指導の重要性を指摘したのは、羽田野（1984）である。羽田野は、講義の中で、ある概念や社会現象を説明する場合、研究者の説を紹介しながら説明する場合と、図や表を使用して説明する場合があると、それぞれについて談話の運び方、論旨の展開のさせ方がパターン化されていることを指摘する。確かにこうした“知識”を念頭に講義を聴けば、理解は格段に進むであろう。しかし、羽田野の指摘した談話構造のパターンは、90分に及ぶ現実の大学の講義のなかでは、応用が効かないことがままあ

る。現実の講義は、もっと複雑に入り組んでおり、逸脱やいい間違いも頻々と現れるからである。

ただ、「講義理解を困難にしている要素に語彙や文法を超えた談話構造の捉えにくさがあり、その把握の手がかりとなる言語形式を明確にする」という羽田野の研究の切り口はたいへん有効に思える。そこで、次の章で、ここまで紹介した先行研究の成果を談話構造の把握に生かす手だてを、筆者の授業実践を例にとりながら考えてみたい。

5. 構造マーカ－の定義と構造マーカ－仮説

筆者は2003年春学期、追手門学院大学の学部科目「日本語聴解1」において、専門日本語の講義理解、すなわち談話構造の把握が、講義中の「構造マーカ－」によって促進されることを検証するための研究授業を行った。その実践報告のまえに、「構造マーカ－」の本稿における定義、および研究授業を通じて検証したい仮説を明確にしておく。

5-1 構造マーカ－の定義

山元(1993)が「談話語彙」といい、三國(1998)が「話の流れを示す表現」等と言っているものは、いずれも講義を聞く際の「構造マーカ－」に近いものと呼ぶことができる。「構造マーカ－」とは、「講義全体の構成をはっきりさせたり、今聞いていることが講義の中でどんな位置づけにあるのかを示す働きをもつ表現(片山・和田2003)」である。また「これまで話した・これから話す内容に言及し、それが講義の中でどのような位置づけにあるのかを示す表現(同上)」とも言い換えている。「構造マーカ－」の中で典型的なものは、おそらく「言うことに言及するタイプの接続詞」(甲田1996)であろう。すなわち、「なぜなら、だって、というのは、すなわち、ようするに、たとえば、ただし、もっとも、なお、つまり」等といった接続詞である。しかし、「構造マーカ－」はそれだけに留まらない。「第一に、もう一つは、最後に」のような機能的には“準接続詞”と呼びうるものから、「さきほど申しましたように、問題は3つあります」のように、専門日本語の講義で半ば慣用的に用いられるものまで、はば広く含む概念である。本稿でも、基本的にこの片山・和田の定義に従う。ただ、片山・和田によると、「構造マーカ－」の概念は、定型を大きく逸脱した任意表現、たとえば、「寺子屋はその前だからね、ね、あの、江戸時代ぐらいの話ですから、ちょっとそれは切り分けといてください」のような談話まで含んでいるようである。本稿では言語形式として定型化できない任意表現まで「構造マーカ－」に含めることはせず、複数の日本語母語話者8名(20代3名、30代2名、40代2名、50代1名)が「講義の中でよく使用される慣用的な表現」と認定する表現を「構造マーカ－」の上限とした。詳しくはAppendix 3の【 】で括られた

語句を参照されたい。なお、母語話者8名は、いずれも大学関係者で、専門日本語の実態を熟知している。

5-2 構造マーカ―が講義構造の把握に及ぼす影響に関する仮説

筆者は、講義の中に現れる様々な「構造マーカ―」を意識的に聴く態度が、講義談話の構造把握に少なからず影響すると考える。そこで、「大学で学ぶ留学生が専門分野の講義を聞くに際しても、『構造マーカ―』に注意を払うことによって、講義構造の理解が促進される」という仮説を立てた。

6. 研究授業の実践報告

以下に上の仮説を検証するために行った研究授業の概要とその結果について記す。

6-1 対象者

今回、分析の対象とした学習者は、追手門学院大学に在籍する学部留学生のうち、2003年度春学期、筆者が担当した「日本語聴解1」を履修した1、2年生22名である。国籍は、全員中国。専攻は、経済学6名、経営学12名、文学部4名。学習者はいずれも2年以上の日本語学習歴をもっているが、日本語能力試験1級に合格したものは皆無で、日常会話には不自由しないが毎日の講義にはかなり難渋している。なお、今回の対象者については、学年の違いが日本語能力とほとんど関係していないことを診断的テストで確認している。

6-2 教材

「大学・大学院留学生のための日本語① 読解編（アルク刊）」の第12講、「カラスの自動車利用行動」の本文部分（Appendix 1 参照）をテープに録音したものを教材とした。録音の際には、本文の語彙や構文を一字一句正確に音読するのではなく、吹き込み者に内容や構成を大まかに覚えてもらい、実際に教室で板書しながら講義してもらった。教材の選定には、①短くまとまっていること。②ロジックが明快であること。③客観的な数値やデータに基づいて、分析、考察がなされていること、以上3点を考慮した。

6-3 授業の手順

授業は、週1コマ90分の授業を2回使って行われた。以下に大まかな手順を記す。（Tは教師の活動、Sは学生の活動）

(1) 日本語能力に差がないクラスを2つ（11名ずつ）作り、②から⑨までの手順をす

べてたどるクラスを A クラス, ②③⑥ の手順を省略するクラスを B クラスとする (T)。

- (2) 講義の中に現れる「構造マーカー」の役割について説明する (T)。
- (3) 以前の授業で使った講義のスクリプトを見て, 「構造マーカー」をできるだけ多く見つけ出す練習をする。練習のあと, 答え合わせをして, 理解を深める (S)。
- (4) 「カラスの自動車利用行動」の講義を聴く前に, 語彙を確認し, 問題意識を高めると同時に, 被験者である学生のスキーマ (既有知識のまとめり) を均質化するタスク (Appendix 2 参照) を行う (T)。
- (5) 「カラスの自動車利用行動」の講義をテープで聴き, 大まかな講義の構造を把握する (S)。
- (6) 講義の中で「構造マーカー」だと認定できた表現を思い出させ, 時系列で板書していく (T)。
- (7) もう一度聞く (S)。聴きながらノートをとるよう指示する (T)。(A クラスは板書の「構造マーカー」を参照しながら聴いている)
* ここまでで, 第 1 回目授業は終了。教師はノートを回収する。
- (8) ノートを返却して, 再度テープを聴く (S)。ノートしきれていない内容を補うように指示する (T)。
- (9) ノートを基にして, 原稿用紙にできるだけ詳しく講義を再生し, 教師の文法のチェックを受けてから清書し, 提出する (S)。
* 教師は原稿用紙を回収する。

6-4 分析方法

分析は, ノートに基づいて学生が再生した文章を対象に行う。そして, 講義が詳しく正確に再生されていればいるほど, 講義がよく理解されているとみなす。A クラスと B クラスの作業手順の相違は, 「構造マーカー」に注意を向けさせたか否かの 1 点のみであるから, もし講義テキストの再生度に有意な差が見出されれば, 「構造マーカー」によってテキストの構造を追いながら講義を聴くことが, 講義理解になんらかの影響を与えたと結論してよいだろう。

講義テキストの再生度の数値化は, 下記の方法によった。

- (1) 講義の「逐語的記憶」ではなく「意味の記憶」(大村 2001 注参照)の再生をみるのが目的なので, 表記や細かい文法, 語彙の間違いは無視し, 命題(意味単位)が把握され再生されていればそれをひとつの“理解”とみなす。
- (2) 1 命題につき 1 点と数え加算していく。
- (3) 命題の再生順に若干の異同があっても, 命題内の意味内容が再生されていれば得点を

与える。

(4) 「構造マーカー」部分は、命題が正しくても得点対象としない。

ここで、命題（意味単位）について補足説明したい。本稿での命題とは、心的表象の最小単位、すなわち真偽判断が可能となる知識の最小単位のことである。たとえば、

蟻が台所にいた。

ジェリーがテーブルの上にあった。

ジェリーは甘かった。

蟻がジェリーを食べた。（この例文は Bransford & Franks 1971 から引用）

各文は1つの述語（動詞や形容詞）と1つまたは複数の項（名詞）によって構成される1命題文である。もし

台所の蟻がジェリーを食べた。

なら、1つの文の中に二つの表象（台所に蟻がいたコト、蟻がジェリーを食べたコト）のある2命題文ということになる。

テーブルの上にある甘いジェリーを蟻が食べた。

なら、3つの命題（テーブルの上にジェリーがあるコト、ジェリーが甘いコト、蟻がジェリーを食べたコト）をもった3命題文ということになる。

この命題表象理論の考え方で「カラスの自動車利用行動」の講義を逐語的に書き起こしてみると、Appendix 3のように、全部で142の命題から構成されていることがわかる。

6-5 結 果

次にAクラスとBクラスの講義の再生度を示す。一人一人の得点は、正解できた命題数を総命題数142で割り100をかけたものである（小数点以下は切捨て）。なお、通し番号は先に行った診断的テストによるクラス内順位を表している。

		Aクラス（構造マーカーあり）		Bクラス（構造マーカーなし）
1	学生 a	66	学生 l	56
2	学生 b	47	学生 m	24
3	学生 c	49	学生 n	35
4	学生 d	38	学生 o	47
5	学生 e	38	学生 p	29
6	学生 f	22	学生 q	49
7	学生 g	35	学生 r	29
8	学生 h	46	学生 s	35
9	学生 i	34	学生 t	34
10	学生 j	38	学生 u	46
11	学生 k	7	学生 v	26

6-6 考 察

前頁の結果を見ると、講義を聴く前に「構造マーカー」に注意させた A クラスのほうが、特に「構造マーカー」に注意を払わせなかった B クラスより、一部の例外を除いて上回っている。無論、今回のような少人数対象の調査では、「構造マーカー」の効果のほどを正確に測定することは難しい。また、今回の講義は 15 分程度の短いものだったので実際の講義でも同じ結果が出るかどうかはわからない。したがって、5-2 の仮説が十分検証されたとはいえないが、少なくとも「構造マーカー」が講義の見通しをよくし、理解を容易にする手がかりになりうることは示唆できたと思う。

7. お わ り に

本研究では、留学生の講義理解を難しくしている言語的要因を、先行研究を参考に考察し、「語彙や構文の理解だけでなく、講義の談話構造の全体的把握ができないことこそが、講義理解を困難にしている」と考えた。そして、講義の談話構造把握の手がかりとなる「構造マーカー」に学習者の注意を向けさせることによって講義理解が促進されることを、研究授業を通して示そうと試みた。以下に、残された課題について、記しておきたい。

- (1) 調査対象人数が少数だったので「構造マーカー」と講義再生度の相関を統計的に検定することができなかった。また、たった 1 回の講義だけから得た数値では信頼性に乏しいといわざるを得ない。今後、いくつかの講義で同じ試みを積み重ねていく必要がある。
- (2) 「構造マーカー」の定義に曖昧さを残している。今後、「構造マーカー」の実例を数多く集め、形態別、談話内での役割別に分類、整理していく必要がある。
- (3) 「意味の記憶」の最小単位である命題を留学生の文章から抽出する作業は、かなり困難であった。正しく命題が把握されているのかどうか、主観的な判断に頼ってしまうことが往々にしてあった。上記(2)の作業を厳密に行うことにより、この判定は容易になるだろう。
- (4) 講義談話のなかには、雑談や余談が混じる。今回はこれらが再生された場合も命題にカウントした。しかし、雑談や余談はむしろ再生されないで「意味の記憶」から削除されるべき内容である。削除を促す「構造マーカー」を集め分類する必要がある。

注

「意味の記憶」とは、「逐語的記憶」（歌詞や俳句を覚えるように原文を文字どおり記憶すること）と違って、読むこと（聞くこと）を通じて読み手（聞き手）の中に構築される表象の意味である。（大村 2001）

参 考 文 献

- アカデミック・ジャパニーズ研究会（編）2001『大学・大学院留学生の日本語①読解編』アルク
- 大村彰道 2001「文章理解：結束性と意味の創造」『文章理解の心理学 認知，発達，教育の広がりの中で』1-16 北大路書房
- 岡 益巳 1994「経済学部留学生のための経済用語の指導について」『日本語教育』82号 23-33
- 片山智子・和田綾子 2003「大学の専門講義理解を助けるストラテジートレーニング」『2003年度日本語教育学会春季大会予稿集』134-139 日本語教育学会
- 金久保紀子・金 仁和・本田明子・松崎 寛 1993「講義の日本語における理科系・文科系の特徴」『日本語教育』80号 74-90
- 小宮千鶴子 1995「専門日本語教育の専門語 —— 経済の基本的な専門語の特定をめざして ——」『日本語教育』86号 81-92
- 西條美紀 1999『談話におけるメタ言語の役割』風間書房
- 西條美紀 2001「談話構造図作成法によるノートテキングの訓練効果について」『紀要』14 早稲田大学日本語研究教育センター
- 重松 淳・長谷川恒雄 1988「講義の聴解指導」『日本語教育』64号 99-108
- 野村美穂子 1996「大学の講義における文科系の日本語と理科系の日本語 —— フィラーに注目して ——」『文教大学教育研究所紀要』第5号
- 羽田野洋子 1984「聴解力育成のための教材 —— 講義の分析を通して ——」『日本語と日本語教育』13号 53-66 慶応義塾大学国際交流センター
- 三國純子 1998「講義の聞き取りに関する分析と問題点」『文化女子大学・社会科学研究』第6集 211-224
- 村上京子「留学生と日本語教育 —— 学部留学生の実態と問題 ——」『留学交流』vol. 15, no. 3 ぎょうせい
- 村田 年 1996「経済学専門用語四字漢語の語構成 —— 専門分野導入期の日本語教育の方法を探る ——」『日本語教育』91号 84-95
- 山元啓史 1993「日本語の説明文と専門文献における手がかり語の特徴に関する研究」『筑波大学文芸・言語学系 文藝言語研究 言語編 24』115-128
- 山下直子 2000「外国人留学生の講義理解 —— 理解に影響を与える要因とストラテジーに関する意識調査から ——」『日本語教育』107号 95-104
- 山本富美子 1994「上級聴解力を支える下位知識の分析 —— その階層化構造について ——」『日本語教育』82号 34-46
- 山本富美子 1995「講義，対談等の聴解のメカニズム —— テクスト分析をとおして ——」『日本語教育』86号 13-25

Appendix 1 『カラスの自動車利用行動』本文（大学・大学院留学生の日本語①読解編 pp. 95 - 96 より抜粋）

1. はじめに

「カラスの自動車利用行動」というのは、カラスがクルミを道路上に置いて車にひかせ、割れた中身を食べる行動である。赤信号で停車した車のタイヤの前にクルミを置く行動や、車が通りそうな道路上に前もってクルミを置く行動、走っている車の前に出て行って停車させ、タイヤの前にクルミを置く行動など、多様な形態がある。筆者は1992年2月、仙台市川内の東北大学近くの交差点で自分自身が運転していた車の前にクルミを置かれたのがきっかけで、カラスの自動車利用行動に関心を持った。カラスが上空から木の実を落として割る行動は、以前からよく知られている。しかし、車を利用して割る行動については、いつ、どこで、どんなきっかけで学習され、どのように広まったのか、これまでほとんど知られていない。そこで、「カラスの自動車利用行動」について観察と調査を行った。

2. 観察と調査

観察の結果、次のことが判明した。まず、ハシボンガラスだけが自動車利用行動をする。ハシプトガラスは自分では努力をしないで、ハシボンガラスが車に割らせたクルミをとって食べる。次に、自動車利用行動が見られる場所には共通点があることがわかった。それはクルミの木が近くにあること、クルミを割らせ、それを食べるのに都合のよい適度な交通量があることである。また、これらの場所のほとんどは、車が停車したり、ゆっくり走る交差点やカーブである。

次に、自動車利用行動が、いつ、どこで最初に始まったのかを知るために、アンケート調査を行った。調査は東京大学の鳥学の樋口教授と共同で行った。まず、1994年12月に質問紙を発送した。対象は北海道と東北地区の「日本野鳥の会」の会員など約700名である。質問は、自動車利用行動を見たことがあるかどうか、あるとすれば、いつ、どこで、どのような形態のものだったか、についてである。

3. 結果と考察

回収率は70パーセント以上である。調査から次のことがわかった。調査対象者のうち、自動車利用行動を見たことがある人は100人近くいる。場所については、仙台市で約20の地点が挙げられており、宮城県内の仙台市以外の地点のほか、他の県でも見られている。仙台市におけるカラスの自動車利用行動については、最も古いものが1975年ごろのもので、その場所は市内のK自動車学校である。また、仙台市の地図の上に、各地点で最初に自動車利用行動が見られた年を記入し、同じ年を線で結んでいくと、等高線のような図形になる。そして、その中心はK自動車学校である。

このことから、自動車利用行動は1975年ごろK自動車学校で発生し、そこを中心にして広がったものと考えていだろう。K自動車学校は、自動車利用行動の発生に適した条件がそろっている。まず、近くにクルミの木が多い。また、自動車学校の中で練習している車はゆっくり走り、しかも、何度も停車する。交通量も道路に比べて多くないため、カラスはクルミを食べやすい。さらに、ここでは以前から、上空からクルミを落として割る行動が見られていたという。これらのことから、カラスが上空から落としたクルミが練習中の車に偶然ひかれて割れ、それを見たカラスが、クルミを車にひかせればよいということに気がついたのではないかと考えられる。

自動車利用行動は仙台市以外にも全国的に広く見られるものであるから、その発生についても仙台市以外の複数のケースを考えなければならないが、仙台市の例は、鳥によって新たに学習された行動が、一つのルーツの地点から年々広がっていった過程が見られる珍しい例である。

[仁平義明「自動車学校で学習したカラス」『本』（講談社）より レポート形式に構成]

Appendix 2 講義を聴く前に、語彙を確認し、問題意識を高めるためのタスク

日本語聴解1～講義を聞き、ノートを取り、意見や感想をまとめる技術⑥～
今回のテーマ……研究報告『カラスの自動車利用行動の研究』より

1. テープを聞く前に、話し合しましょう。

(1) もし、あなたがあるテーマについて、ゼミで研究報告をするとしたら、どんな順番で話をしますか。()の中に番号を書きなさい。

- () 仮説の設定……ある未確認の事象に関する仮の説明。
- () 研究の動機……どんなきっかけから、この研究テーマを選んだのか。
- () 研究の目的……研究を通して、なにを明らかにしたいのか。
- () 結果と考察……観察や調査の結果、何がわかったのか。
- () 研究の方法……仮説を検証するために、どんな観察や調査をするのか。
- () 先行研究の紹介と問題点……過去の研究で何が明らかになったのか、問題点は何か。

2. 下の写真を見てください。カラスはどんな目的で、何をしようとしているのでしょうか。



3. 語彙……()の中に読み方を書きなさい。そして意味を確認しなさい。

- ①レジュメ ②クルミ(胡桃) ③車が轢く ④殻 ⑤バリエーション ⑥交差点
() () () () () ()
- ⑦差し掛かる ⑧シャッター ⑨上空 ⑩木の実 ⑪餌 ⑫豊富 ⑬自生
() () () () () () () ()
- ⑭仕掛ける ⑮判明 ⑯ハシボソガラス ⑰ハシブトガラス ⑱横取り ⑲カーブ
() () () () () ()
- ⑳アンケート調査 ㉑日本野鳥の会 ㉒回収率 ㉓宮城県仙台市 ㉔頻繁
() () () () () () ()
- ㉕K自動車学校 ㉖等高線 ㉗同心円 ㉘図形 ㉙発生源
() () () () () () ()

Appendix 3 「カラスの自動車利用行動」の講義スクリプト、および各談話文の命題数(【 】の箇所は「構造マーカー」で命題に含めない。文末の数字が1文中の命題数)

1. えー、【前回は、動物の、おー、習慣形成についてお話したわけですが、】今日は、【お手元のレジュメにもありますように、】あの、『カラスの自動車利用行動』というテーマについてお話ししたい

留学生の講義理解

- と思います。…… 1
2. 【まず、レジユメの写真をご覧ください。】
 3. 【最初にこの写真について、えー、説明しておきますと、】車道の真ん中にカラスね、カラスがおります。…… 1
 4. あの、なにをやっとるんでしょうかね。…… 1
 5. 信号待ちでしょうかね。…… 1
 6. 車が白線の、おー、内側で止まっています。…… 1
 7. よく見ると、カラスの前になんかこう、黒い物が転がっておりますね。…… 2
 8. えー、【みなさん、これは何だと思われます？】
 9. そう、そうね、クルミです。…… 1
 10. そうです。
 11. どうやらこのカラスはですね、クルミを車に、こう、轢かせて厚い殻の中身を食べてようとしているらしいんですね。…… 3
 12. えー、【じつは、】このようなカラスの行動は、今では日本全国で見られます。…… 1
 13. この写真のように、赤信号で停車したね、車の前に置く場合もある。…… 4
 14. 【また、】車が通りそうな道路に、こう、置くこともある。ね、…… 3
 15. 【さらに、】中には走っている車をですね、わざわざとっ、止まらせて、置く場合すらあるんです。…… 4
 16. 私はこうした行動を、『カラスの自動車利用行動』とね、呼んでいるんですね。…… 1
 17. あっ、中国にも、あっそう、ありますか。…… 1
 18. でも、日本は異常にカラスが多いですよ。…… 2
 19. ごみがね、ごみが多いからねえ。…… 1
 20. 【ま、それはともかく、】こうしたカラスの行動はいつ、どこで、どんなきっかけで、【この間の話じゃありませんが、】学習され、広まったんでしょうか。…… 2
 21. 今回の研究の目的は、【つまり、】これを明らかにすることです。…… 2
 22. 先行研究ってないんです。…… 1
 23. ぜんぜんない。…… 1
 24. 【さて、】この、あの、カラスの変な行動を調査する前に、あー、私は【次のような】仮説をたてたんですね。…… 3
 25. 【まず、】【当然のことですが】こうした行動は餌ね、クルミがなければ始まらないのは誰でもわかる。…… 3
 26. 【だから、】クルミの木がたくさん生えているところから始まったんじゃないかとね、思ったわけですね。…… 4
 27. 【二つ目に、】【これはちょっと自信がなかったんですけど、】信号が多い道路で発生した行動じゃなかったかと思ったんですね。…… 4
 28. 高速道路みたいに、車がびゅんびゅん走っていたら、ほらね、クルミ食べる暇なんかカラスありませんよね。…… 3
 29. この二つの仮説、【もう一度いうと、】クルミがあるところで、なおかつ信号待ちの道路ですね。…… 3
 30. 【次に】研究の方法ですけど、えー、【今回は2本立てです。】
 31. 現地観察とアンケート調査ですね。…… 2
 32. 【まず、現地観察ですけど、】えーと、この、カラスの自動車利用行動がよく見られるところ、東

- 北地区が多かったんですけど、そういうところへ行きますして、1日中ビデオカメラを回し続けたんですね。……4
33. たいへんでした。えー。……1
34. 【ご存知のとおり、】カラスは頭がいい鳥だから、電線なんかに止まって逆にこっちが観察されちゃう。……4
35. 根競べですね。……1
36. でも苦勞の甲斐あって、おもしろいことがわかったんです。……2
37. 【一つ目は、】ハシボソガラスだけがクルミを持ってくるんです。……1
38. ハシボソガラスは、なーんもしない。……1
39. 餌を横取りするだけ。……1
40. あっ、カラスに二種類あるの知ってますね。……2
41. くちばしの細いやつがハシボソ、太いのが、あの、ハシボソガラスですね。……4
42. 【でも、このことは、今回は議論とあんまり関係ないので、】大切なのは、あの、観察をしたところには、かならず、近くにクルミの大木があったということです。……3
43. 【それから、】ビデオに映ってるカラスは、道のカーブや交差点にクルミを置くんですよ。……2
44. 勢いよく車が走っていくところには間違っても置かない。……3
45. 【一方、】アンケート調査ですね、これは全国の、あの、日本野鳥の会の人たちにアンケートしたんですが、【質問は2つ。】……1
46. あなたは、カラスの自動車利用行動をみたことがありますか。……1
47. 【で、もう一つは、】そのね、あると答えた人は、じゃあ、いつ、どこで、カラスは何をしたかっていうものです。……3
48. 野鳥の会の会員の70%以上の方が協力してくれました。……2
49. その中でカラスの自動車利用行動を目撃したことがある人はっていうと、100人ぐらいいました。……2
50. 場所は、やっぱり、仙台市が多かったですね。……1
51. 20ヶ所ぐらいあったんですけど、中でも仙台市内のK自動車学校のまわりがいちばん多かった。……2
52. 【それだけじゃなくてですね、】いちばん古い記録ね、1975年ごろからここではカラスのこの行動が目撃されているのね。……2
53. ね、いったいこのK自動車学校って何っていう感じですよ。……2
54. 皆さんは等高線、知ってますね。……1
55. 仙台市の地図の上に、各地点で最初にね、自動車利用行動が観察された年を書き入れて、こう、同じ年を線で結んでいくと、ほら、等高線みたいな同心円が描けたでしょ。……6
56. この中心がこのK自動車学校だったんですよ。……1
57. 【さて、結論です。】
58. 以上の観察と調査【から次のようなことが、え、いえると思うんですね。】
59. カラスの自動車利用行動は、1975年ごろ、仙台市のK自動車学校で発生して、そこを中心にして広がっていったんです。……2
60. 【じつは、】K自動車学校は、カラスにとっていい条件が、そろってる。……2
61. 【まず、】学校の周りにクルミの木が多い。……1
62. 【また、】自動車学校の車は、よく止まる。……1
63. 【それに、】ゆっくり走ります。……1

留学生の講義理解

64. 当然でしょ、運転の練習をしているんですから。…… 2
65. カラスはのんびりクルミが食べられるわけです。…… 2
66. 【そのうえ,】【これはあとでわかったことなんです,】この学校ではずいぶん前からカラスが空からクルミをね, こう, 落として割る行動がよく見られたというんですね。…… 3
67. カラスは見ていたんでしょうね。…… 1
68. 空から落としても割れなかったクルミが, 練習中の車に轢かれて割れるのを見ていたんでしょうね。…… 5
69. 【そんで,】群れの中でいちばん賢い奴が, ある日道路にそっとクルミを置いたんでしょう。…… 3
70. それを他のカラスが次々にまねしていったんじゃないかなあ。…… 1
71. 私の仮説は, これでだいたい検証されたと思います。…… 2
72. 【もういちど確認すると,】えー, カラスの自動車利用行動がですね, クルミの豊富にある場所から始まった, ということ, そして信号の多い場所で始まったということ, 以上2点でした。…… 5
74. 【それにしても,】自動車学校が発生源だったとは意外でした。…… 2